登場人物

代永翼・臆病キャラ

鳥海浩輔・エリートハンター

運び屋・運び屋

ステージ１

最低人物モデル3人

ドラゴン3匹

声優6人

「」セリフ

『』心の声

ナレーションor CとDの会話から始まり回想スタート

草影に隠れながら作戦説明

鳥海「いいかまず俺が足元に攻撃を仕掛ける。襲ってきたら代永がガード、ガードしてる間に俺が上から攻撃、最後に代永がブッ叩くいいな」

代永「…うんわかった」

鳥海「そんじゃいくぜ」

二人とも草影から出る

↓

鳥海が足元を攻撃

↓

モンスターが反撃

↓

鳥海が代永の背後に回り込みモンスターの攻撃をガード

↓

鳥海が上からジャンプして追撃でモンスターがひるむ

↓

鳥海「いけ！代永！」

飛び込んで決めると思いきや、代永の中でトラウマな過去が思い出し攻撃を途中で止めた。

鳥海『まだきつかったか』

モンスターがしっぽで攻撃しようとする

鳥海「いったん下がれ！」

代永は下がって盾でガード構えをする。その間にモンスターを倒す鳥海 ここはほぼSEのみ

鳥海「ふぅ～う 終わったぜ」

代永「ごめん…また足引っ張っちゃね」

鳥海「気にすんなよ、お前の世話なんかもう慣れたもんさ」

代永「うん…ごめん…」

鳥海「おいおい何度も謝んなよ、お前がモンスターの狩りが苦手なのは知ってんだ。最初のガードは頼りになったし、危険な時は無理せず下がればいい。その代わりまたうまいもん作ってくれよな！」

代永「…うん」

代永『僕は代永翼臆病でいつも助けられてばかりで情けない奴さ、この人は鳥海浩輔。通称：とりさん 僕の幼なじみで小回りが利く僕の中では一流ハンター』

鳥海「いやーしかしそこそこいいやつ狩れたな。これなら2,3日は持つだろう。だがこれじゃあデカすぎて持ち運べねえな。そうだ運び屋にでも連絡とるか。」

回想

代永『狩りができない料理も微妙でコミュニケーションもとれないからか誰にも相手にされなかった僕だった。そんな僕のパートナーになってくれたかけがえのない存在』

回想が終わった後。鳥海が打ち上げ花火を準備して放つ

代永『今でもかけがえのないパートナーで一緒にいて楽しいでも…』

鳥海「よし連絡完了。おい代永！……？」

代永『いつも足を引っ張てばっかりで何も手助けできてない。こんな弱小な僕と一緒に居続けてもいいのだろうか』

代永に近づく鳥海

鳥海「おーい。き・こ・え・て・る・か？」

代永「えっ何？」

鳥海「ったく一応任務中なんだぜ？ボサッとすんなよ。とりあえずさっき倒したモンスターがデカくて運べそうにねーから運び屋を呼んどいた、それまで待機。いいな？」

代永「うんわかったよ」

鳥海「重さとしては運べなくはないが、運んでる最中にモンスターにでも襲われたら、食料と一緒に俺たちも食われちまうなハハ」

代永「…」(少しうつむく)

鳥海「あー。そんなに気を落とすなって。どんなお前でも見捨てたりしねーよ俺は」

鳥海「見捨てられる苦しみは俺一人で十分だ」(振り向いて小声)

代永「えっそれって…」

鳥海「なんでもねーよ おっ！きたきた」

代永「ずいぶん砂ぼこりが舞ってるみたいだね」

鳥海「ああ確かにな」

運び屋と巨大モンスターが近づいてくる

巨大モンスターが近づいた瞬間。鳥海の過去がよみがえる。

鳥海「あいつは」

代永「えっ何！」

鳥海「まずい隠れろ！」

巨大モンスターが脇道をまっすぐ進んで奥に行く

代永「は、早く逃げよう」

鳥海「すぐ逃げるのはまだ早い。まだ運び屋が敵を引き付けている。その間に俺たちは食料かついであそこの洞窟避難。その後合図でも送ればこっちに向かってくるこの作戦でいいな」

代永「うん分かった」

モンスター中を二人で運ぶ

洞窟前までたどり着いたが、思った以上に運び屋が早くこっちに来てしまい衝突

衝突しながらも巨大モンスター以外は洞窟内に入り身を隠す

鳥海「みんな無事か」

代永「う、うん」

運び屋「なんとか助かったぜ」

鳥海「運び屋のおっさんも何とか生きててよかったな。まあもう少―しおとりになってもらった方がドタバタせずに済んだけどな」

運び屋「そんな無茶苦茶なこと言うんじゃね」

鳥海「へへっ さてとこの後どうすっか」

洞窟入り口前を右往左往している巨大モンスター

鳥海「まだこっちの気配に気づいてなさそうだ。今のうちに荷物を積んでおくか」

荷物を縛りながら作戦会議。作戦鳥海:モンスターおびき寄せ・代永:運び屋の援護

鳥海「この重さで駆け抜けることは到底不可能だろう そこでだ俺がおとりになって洞窟から離れるように誘導する スキができたらおっさんと代永は草道抜けて逃げて」

代永「ええっ！危険すぎるよ僕も一緒に…」

鳥海「何言ってんだ。全身震えまくりじゃねーかそんな状態じゃかえって足手まといになっちまう それに運び屋が襲われたら誰が守るんだ？」

代永「そ、それは…」

運び屋「俺は一人でも問題ねーけどな」

鳥海「そんじゃ代永を安全なとこまでしっかり運んでもらおうか 何かあったらただじゃ済ませねーけどな」

運び屋「とんでもねえ要求だな それだけ大事にされてるってわけか」

鳥海「うるせえ！」

少しうつ向いている代永の方を向く

鳥海「大丈夫だって。少しおびき寄せるだけだ お前たちが逃げきれたらすぐ戻るさ」

鳥海が少し息を整える

鳥海「いくぜ！」

鳥海が先に洞窟から出る

運び屋がいつでも出れる準備をする

運び屋「一瞬が命取りだ！しっかりつかまれよ」

鳥海は奥の方におびき寄せるのに成功

運び屋「今だぜ！」

運び屋は草道を抜けて無事脱出

鳥海が一発ひるませる技をお見舞いしてから馬車の方を向く

鳥海「うまくいったみたいだな… さてあの時のケリつけさせてもらうぜ」

モンスターのひるみが解けて叫ぶ

運び屋がフォローで走ってるシーン

後ろに乗ってるのを一瞬見せてから。代永の思考内での会話のBGは真っ暗

代永『これでよかったのかな？鳥さんの事だから多分大丈夫だろう…大丈夫…。』

少し落ち着いた後に小声で言っていたセリフを思い出した。

鳥海『見捨てられる苦しみは俺一人で十分だ』

代永「！！」

代永は馬車から飛び降りて鳥海のところに向かった

運び屋「んっ一気に軽くなったな…！」

急いで後ろを見て代永が走りっていくのを見る

運び屋「まじかよ…」

鳥海「ぐはっ」

岩に叩きつけられる鳥海

鳥海「やっぱり一人じゃきつかったか はぁはぁ」

岩を背もたれにしながら倒れっこむ鳥海

鳥海『こんな時に代永がいたらカバーしてくれるんだろうな』

鳥海『あ…見捨てられちまった感覚がよみがえるぜ… いや今回は見捨てちまった方だっだな。』

代永「うおおおおぉ」

代永が走り込んでモンスターの攻撃を防ぐ

「ぐぐぐっ」

モンスターが代永の武器を狼爪でつかみ、押し合いになる

鳥海がおさえぎみの怒りで説教をしようとしたとき

鳥海「どうして戻ってきた？モンスターが怖いなら帰って待ってろって言っただろ。」

代永「ああ怖いさ体が縮こまって動けやしない…」

鳥海「だったら…」

代永「でも！モンスターよりも鳥さんを失うことが一番怖かった！」

鳥海「！！」

代永「いつも優しかった鳥さんが、いつもそばにいてくれた鳥さんが、いなくなるって考えたら苦しくて辛くて指を加えて待ってるなんでできないよ！」

鳥海「代永…」

代永「死んでほしくない！いなくなってほしくない！また一緒に冒険がしたい！だから僕は！僕の力で鳥さんを守るんだ。」

強く押し込まれる代永「うぐぅっ」

代永「こんなところで死なせてたまるかー」

鳥海「…へへっ ちょいとばかしお前さんをなめてたぜ そして」

モンスターをひるませる攻撃をする

鳥海「俺もなめられたもんだぜ」

鳥海「こんなところで死ぬような俺じゃねんだよ たく」

代永「とりさん…」

鳥海「そんじゃ俺たち二人でぶっ倒してやろうぜ」

代永「うん」

↓

巨大狼との対決

斬ってよけるの繰り返し

最後に一発代永が決める

↓

打ち倒す

↓

記念日として岩に彫り込む 時間がなければここでEND

↓

Dの回想に戻ってEND